

# 文学部創設10周年を記念して

英語英米文学会会長 金城盛紀

桃山学院大学は創設30周年を迎えた1989年、新たに文学部を増設し、英語英米文学科が産声をあげた。『英米評論』第14号をもって、英語英米文学専攻のスタッフが集うことになった文学部の10周年を祝うことができるのは、私たち関係者一同の大きな喜びとするところである。

十年一昔というが、その間には英語英米文学会も生れ、会員の研究を促進した。機関誌『英米評論』はもとより、文学部の姉妹研究誌である『国際文化論集』や『人間科学』のみならず、学外の定期刊行物にも研究の成果を発表し、さらに、単独あるいは共著の形で研究書を公刊して、日本の英語英米文学研究の進展に寄与してきた。1993年には大学院文学研究科が開設され、英語英米文学専攻および国際文化学専攻の修士課程が発足した。さらに、文学部創設10周年を記念する本年は、比較文化学専攻という名称で、博士後期課程が増設されて、私たちの専攻分野を含む最高の研究教育機関としての制度が完成する新しい門出の年となった。この記念号には、審査の上、後期課程の学生による論文も掲載される運びとなった。大学院学生としては初めてのことである。

文運隆盛を寿ぎ祝い御同慶の至り、と結びたいところである。しかし、現実には厳しいものがある。日本において英語が今後、予見しうる未来にかけてますます必要になることはだれも疑わないであろう。だが、植民地ではあるまいし、だれにとって、どれだけ外国語である英語が必要なのか、論議が高まるであろう。義務教育から大学にいたるまで、事実上必修にして、その効果が期待を裏切る現状がいつまでも容認されるとは思えない。また、日本において英語英米文学を研究する意義や価値が正面から問われる日も来るであ

ろう。アメリカの同業者たちは自国語やその言語で書かれた文学を研究対象にしているのであるが、揶揄嘲笑の対象にもされつつあるとの報もある。

目をまなび野に向けても状況の厳しさは変わらない。文学部の成長を祝う本年は、はからずも教員の所属変更を求められる年となり、2年後には学部を異にする英語英米文学会の会員もいる。「世界の市民」を育成することを標榜する学院の語学や外国文学教育の実態はどうなのか、理想が高いだけに課題も山積する。文学より文化を、という時の声も大きくなりそうだ。

しかし、およそ伝統のある文化を重視してその文学を軽視することは想像できない。敗戦後の日本において英語がちやほやされ、英米文学が重きをなしたのは、歴史の偶然であろうが、英語の達人がさまざまな領域で活躍するようになっているのは事実であるし、また、英語学や英米文学の分野においてもよき研究成果が少ないわけでもない。

目前の事象に一喜一憂することなく、自国の文学・文化を大事にすることもゆめ忘れずに、地道に勉強を続けたいものである。21世紀の到来は新しいミレニアムの幕開けとなる。わが国における英語英米文学の研究が「至福の時代」を迎えることにはならないにしても、内外の厳しい状況を鞭撻として、桃山学院大学文学部と英語英米文学会がさらに発展するよう、会員諸氏とともに念じて励みたい。